

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2006 年度－2008 年度
課題番号：18520377
研究課題名 (和文) 日英語における名詞節化形式と意味・機能の関係に関する実証的・理論的研究
研究課題名 (英文) An Empirical and Theoretical Study of the Relationship between the Form, Meaning and Function of Nominalizing Constructions in English and Japanese
研究代表者 大竹 芳夫 (OTAKE YOSHIO) 新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授 研究者番号：60272126

研究成果の概要：本研究は、従来は個別的に論ぜられてきた日英語の名詞節化形式について、両言語を共通の視座で比較対照しながら、知覚や認識の対象を言語化するプロセスの異同を原理的に明らかにした。国際的学術動向を踏まえつつ、総合的視点から研究成果の体系化を行い、その記述的・理論的意義を博士 (応用言語学) 学位論文及び学術図書『「の (だ)」に対応する英語の構文』東京：くろしお出版。単著。【平成 21 年度科学研究費補助金 (研究成果公開促進費 (学術図書)) 課題番号 215060, 日本学術振興会】等にとりまとめて社会・国民に迅速かつ広範に還元することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,700,000	0	1,700,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,400,000	510,000	3,910,000

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：言語学, 英語学, 日英語比較研究, 名詞節, 「の」節, 「の (だ)」, 補文, 指示詞

1. 研究開始当初の背景

生成文法理論、認知言語理論の発展に伴い、英語と日本語の多様な言語現象が比較対照され興味深い特性が明らかにされてきた。本研究では、国際的学術動向を踏まえつつ、最近の言語理論研究の成果を活用し、日英語の名詞節化形式の統語的・意味的・機能的特性について従来の研究では原理的に究明されてこなかった個別的側面と普遍的側面を明らかにする。具体的には、日本語の「の」節と英語の小節及び that 節とを共通の視座で比較対照する。

日本語の「の (だ)」に関する国内の先行

研究は多い。しかし、個別言語の壁を越えた英語との比較対照研究は十分に行われてはいない。例えば、「の (だ)」構文(=(1))に対応する英語として It is that 節構文(=(2))がしばしば示されるとともに、名詞節を補文に従えるという形式的な類似性の指摘にとどまってきた。cf. Kuno 1973; Kuroda 1973; 池上 1981; 田野村 1990; Lombardi Vallauri 1995; Tsubomoto 2000.

- (1) 今日はお金を返せないよ。銀行が全部閉まっているんだ。
(「の (だ)」構文)

- (2) I cannot pay you back today. *It's just that* all the banks are closed.
(It is that 節構文)

日本語の「の」節も英語 *that* 節も補文内容を名詞節化する共通の機能を有する。しかしながら、両者の使用条件は異なると考えられる。さらに、「の (だ)」に対応する英語構文はひとつではない。

- (3) [話し手が脚を搔きながら]
a. 蚊に刺され{ちゃった / ちゃったんです}。
b. {I was bitten / *It is that I was bitten} by a mosquito.
(英語の It is that 節構文は使用できない)
- (4) a. “What is that noise?” “It’s {Jimmy playing the piano / *that Jimmy is playing the piano}.”
b. ジミーがピアノを弾いているのです。
(英語では S be NP V-ing 構文が使用される)
- (5) a. “I take it that you don’t care for the sun?” they enquired silkily.
b. 「あなたは日差しを気にしないんですね？」と彼らはやさしく聞いた。
(英語では S take it that 節構文が使用される)
- (6) a. Why is Mary sad? / {Why is it / How is it} that Mary is sad?
(英語の Why / How 疑問文は名詞節化が随意的)
b. {なぜ / どうして}メアリーは悲しんでいる{の / *何}?
(日本語では「の」が義務的)

本研究では、収集した言語資料を観察しながら、実証的・理論的に「の (だ)」に対応する英語構文の諸特性の解明を試みる。同時に、「の (だ)」と対応する英語構文を統一的な見地から比較検証することにより、「の (だ)」の本質により深く迫ることが可能となると考えられる。言い換えれば、従来は個別に論ぜられてきた英語と日本語の名詞節化形式について、両言語を共通の視座で比較対照しながら、認識や知覚の対象を言語化するプロセスの共通性と相違を原理的に明らかにする。本研究の基盤を成す研究成果の一部は、国内のみならず国外の言語学研究者たちから引用され、世界の諸言語の推論構文の重要な萌芽的研究、独創的研究としての一定の評価を受けている。

cf. 野田 1997; Fukuda 2002; Koops 2007; Rosenkvist 2007. また、日本語学や日本語教育の立場から、「の (だ)」は外国人学習者にとって修得しがたいとか、日本語特有の構文であると指摘されることがある。本研究は、言語学分野のみならず、英語との比較対照の上で「の (だ)」構文の適正な使用を学習者に説明できる面で言語教育分野に十分に貢献できるものであると思われる。また、名詞節化形式を含む構文は実に多く存在し、広範囲に使用されていることから、本研究成果の教育的意義を具現化させながら辞書記述や言語教育に直接反映することができるかと予想される。さらに、本研究は、国内の研究者に先駆的知見を直ちに還元できるように、英語の実例すべてに対訳を付した豊富な言語資料を提供し、英語学、日本語学、世界の諸言語研究を含む広い関連分野に対して波及性が高い研究内容である点にも特徴がある。

本研究で試みる名詞節化という言語化プロセスの究明は人間の認知構造の解明にも直結し、長期的には言語哲学の新たな展望を開拓するものと期待される。

2. 研究の目的

本研究は、日英語の名詞節化形式について共通の視座で比較対照しながら、知覚や認識の対象を言語化するプロセスの異同を原理的に明らかにすることを究極的な目標とする。本研究期間内で主に次の3点を多角的に研究してゆく。

- (1) 名詞節化形式を伴う諸構文を統語的振舞いの相違に基づいて分類し、それぞれの統語的事実を表面的な形式の背後にある抽象的な統語構造と関連付けて説明する。
- (2) 名詞節化形式により言語形式化される伝達内容はどのような情報であるのかを機能的、語用論的観点から明らかにする。
- (3) 英語と日本語の名詞節化形式を比較対照しながら、日英語の知覚認識メカニズムと文法化過程の個別的側面と普遍的側面の実証的解明を試みる。

3. 研究の方法

次の研究方法に沿って本研究対象となる言語現象に対して研究成果を取りまとめる。

- (1) 英語と日本語の名詞節化形式に関するこれまでの研究を、批判的に検証する。日本語の名詞節化形式及び対応する英語の名詞節化形式を統一的な視点から分析し、体系的に記述するために、基本的な文法概念を提出する。
- (2) 実証的な研究を目指し、研究対象となる日英語の構文が用いられている基礎的資料を収集、観察、分析する。

- (3) 日英語の名詞節化形式が示す統語的・意味的特性の異同を考察するために、どのような発話場面や状況によりそれぞれの補文が選択されるかを明らかにしながら最近の言語理論との関連性を検証しつつ、話し手の認識と知覚に関わるメカニズムと文法化過程を説明する理論的仮説を立てる。
- (4) 当該仮説に一見反すると思われる諸例について、英語母語話者及び日本語母語話者をインフォーマントとして活用しながら徹底的な分析を行い、総合的視座から日英語の名詞節化形式の生起に関わる制約を明らかにする。
- (5) 名詞節化という言語事象を通して、日本語と英語の個別性、普遍性の両面を体系的・原理的に明らかにする。併せて、本研究で得られた知見の他言語への敷衍可能性について提示する。
- (6) 本研究で得られた言語学的知見が英語教育、日本語教育でどのような教育的意義をもつのかについてもとりまとめて発表し、示唆と提言を行う。
- (7) 研究成果の記述的・理論的意義を体系化し、博士(応用言語学)学位論文及び一冊の学術図書にとりまとめて社会・国民に迅速かつ広範に還元する。

4. 研究成果

研究初年度の平成 18 年度は、最近の言語理論の研究成果を踏まえながら、両言語間の言語化プロセスの異同を実証的に深いレベルで分析した。本研究対象となる名詞節化形式を含む諸構文のうち、英語の *It is that* 節構文や *S take it that* 節構文に関する基本的分析は Otake (2002) (“Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction.” In Tania Ionin, Heejeong Ko and Andrew Nevins (eds.) . *MIT Working Papers in Linguistics*, Vol. 43, Cambridge, Massachusetts: MIT, Department of Linguistics and Philosophy. (米国マサチューセッツ工科大学(MIT)) pp.143-157.), 大竹 (2004) (「S+take+it+that 節構文の意味と談話機能」『英語語法文法研究』英語語法文法学会学会(編), 第 11 号, 東京: 開拓社. pp.79-93.) を中心に発表済みであるが、平成 18 年度はこれらの英語構文を日本語の「の」節を含む構文と比較対照した。具体的には、{*It is not that / Not that*} 節構文と「のではない」構文、*S take it that* 節構文と「のだ(よ)ね」構文を統一的視点から考察し、英語構文においては既獲得情報を合図する指示表現 *it* が情報の既定化に貢献するが、日本語の「のではない」構文や「のだ(よ)ね」構文においては名詞

節化機能を担う補文標識「の」が命題情報を既定化することを明らかにした。また、次年度の理論的研究の基礎資料として各種データベース、新聞、雑誌、映画、母語話者の発話などから研究対象の構文を収集し、発話場面や音声的特徴について分析した。本研究の萌芽的研究成果は言語学の専門誌のみならず、日英語の言語教育に関する学術専門誌にも発表されている(大竹(2001) “Application of Linguistic Knowledge to English Teaching: from the Viewpoint of Recent Semantic and Pragmatic Studies.” *JABAET Journal*, 日英・英語教育学会学会(編), Vol. 5, pp.87-105.など)。本研究は幅広い学問領域との関連性を視野に入れており、成果として得られる言語学的知見が英語教育及び日本語教育でどのような教育的意義や活用可能性があるのかについても検討を開始した。

平成 19 年度は、第一に、日本語の名詞節化詞「の」を伴う「のだ」、「のではない」、「のか」、「ので」に対応する英語の諸構文の分析・考察結果をとりまとめ、博士論文「*の(だ)*」に対応する英語の構文」を明海大学に提出し、学位(博士(応用言語学))を 3 月に取得した。本学位論文では、*it* の指示性に関する最近の意味論研究や語用論研究の成果、さらには日本語の「の」節との比較検証を踏まえて、「*の(だ)*」構文に対応する英語構文の構造、意味、機能を解明した。第二に、英語以外の世界の諸言語における「*の(だ)*」と同種の構文を次年度以降の研究の基礎資料として収集し、関連する先行研究の成果を批判的に検証した。本研究の分析対象は日英語であるが、東西諸言語の同種の構文研究への敷衍可能性を論じ、従来の個別研究成果についても言語横断的に検証した(フランス語の *C'est que* 構文(Pusch(2006)), スペイン語の *Es que* 構文((Delahunty and Gatzkiewicz(2000), España(1996)), 南部スウェーデン語の *Det är som* 構文(Rosenkvist(2007)), 中国語の「是...的(=shi...de)」構文(杉村(1995), 郭(2003), 魏(2005)など), 韓国語の「것이다(=kes-ita)」構文や「거든(=geoduen)」構文(崔(2006), 金(2007)など))。「*の(だ)*」構文に対応する構文は世界の諸言語に存在し、意味や機能において類似した特性を示す。日本語のように補文命題の既定性を表出するために名詞節化詞「の」、「こと」、「もの」、「わけ」などを発達させてきた言語や、英語のように主題表示が義務的で補文形式のみならず *it* の指示特性を活用しながら既定性を積極的に合図する言語など、言語により既定性の保証過程が異なることを確認し、次年度以降の研究課題を明らかにした。

研究最終年度の平成 20 年度は、平成 18-19 年度の実証的研究で得られた成果を理論的に検証すると同時に、国際的学術動向を踏まえつつ名詞節化形式を伴う諸構文の意味論的、語用論的特性を明らかにした。第一に、本研究の基本的着想を発表した Otake (2002) の研究成果が、国外の言語学者たちの最新論文において世界の諸言語の推論構文の先駆的研究として一定の評価を受けていることが確認できた。cf. Koops (2007) (“Constraints on Inferential Constructions.” In G. Radden *et al.* (eds.), *Aspects of Meaning Construction*. pp.207-224. Amsterdam: John Benjamins.) ; Rosenkvist (2007) (“An Introduction to the South Swedish Apparent Cleft.” In K. Bentzen and Ø. A. Vangsnes (eds.), *Scandinavian Dialect Syntax 2005*, Special Issue of *Nordlyd – Tromsø University Working Papers in Language and Linguistics*. Vol. 34. pp.239-250.) . これらの論考を批判的に検証しながら、It is that 節構文及び南部スウェーデン語の Det är som 構文と「の (だ)」構文とに共通する語用論的効果を考察し、解釈・実情を伝える構文の言語間に見られる特性の異同を分析した。第二に、解釈・実情を表す It is that 節構文と同一談話中にしばしば共起する It is not like 節構文に焦点を当て、It is not like 節構文は、先行する内容に関して聞き手が心中に描くと想定される具体的な状況イメージを引き合いに出して比況したうえでそれを否定すること、結果的に聞き手には容易には知りたい実情や真相を談話に提示するという意識が話し手に生ずることを明らかにした。

本研究は、計画通りに進捗し、日英語の名詞節化形式と意味・機能の関係について、最近の言語理論の知見を踏まえながら実証的に深いレベルで分析を行うことができた。

特に、「の (だ)」構文で表現される事象は英語ではさまざまに切り取られて言語化されることが解明され、次のような知見が得られた。

(1) 発話場面で瞬間的に知覚された事態の同定を表す「の (だ)」構文には、小節を補文に選択する S be NP V-ing 構文が十全に対応する。一方、先行情報の論理解釈や事の真相・実情の同定といった認識レベルで把握できる情報を伝える「の (だ)」構文には、that 節を補文に従える It is that 節構文のような S be (that) 節構文に対応する。両構文の意味的相違は構造上の相違から説明される。つまり、S be NP V-ing 構文の NP V-ing は独立した時制をとらず主節に依存して存在するため、主語 S が指す事態の同定は、知覚

レベルでその事態の存在の確認と瞬間同時的に行われる。一方、S be (that) 節構文は主節と補文が独立した時制をとり得ることから、たとえ進行相が補文内に生じていてもその時間は主節のコピュラ be が表す瞬間的同定時とは全く同時ではない。そのため、S be (that) 節構文は、先行情報や当該状況の真相、実情の同定、論理的解釈といった「知覚的」にはとらえがたい情報を提出することが明らかとなった。「の (だ)」構文は、こうした知覚と認識を区別せず、話し手の知識にすでに取り込まれている情報であることを積極的に表現するという意味特性をもつことが確認できた。

(2) 先行情報や現況を同定するときに、主題表示が随意的である日本語は「の」、「こと」、「もの」、「わけ」といった多様な名詞節化詞を活用しながら補文命題の情報特性を表現できる。それに対して、英語は既獲得情報を合図する指示表現 it を用いることで結果的に補文命題の既定性を表現するという相違を明らかにした。例えば、先行情報の解釈を補文内に与える「の (だ)」構文に対応する It is that 節構文の場合には、主題位置に it を立て先行情報を既獲得情報として積極的に表示したうえで、補文内に既定情報を同定命題として提出する。一方、ある命題内容を既定情報として理解に取り込む過程を開示する「の (だ)」構文に対応する S take it that 節構文の場合には、後続する that 補文の命題内容を it で既獲得情報として積極的に指示することを理論的、実証的に説明した。

(3) 疑問文の「の (か)」に対応する構文として、Which is it 疑問文、Why is it that 疑問文、How is it that 疑問文を取り上げ、名詞節化詞「の」と指示表現 it による命題情報の既定化の類似点と相違点を示した。Which is it 疑問文は、発話に先立ってその答えがどちらかにすでに定まっているものととらえたうえで、その答えを相手から聞き出そうとする状況で用いられること、「の (か)」を伴う選択疑問文と同様に状況によっては相手に事実を問い詰めたり、発言の矛盾を突くといった語用論的含意を帯びることも実証的に考察した。Why is it that 疑問文、How is it that 疑問文の it は that 節内に取り上げた命題内容を積極的に既獲得情報として表示する。そのため、Why is it that 疑問文、How is it that 疑問文の使用は、話し手がその取り上げた事象が不条理に成立していたり、矛盾をはらんでいるにもかかわらず現実に成立していると判断するような場合に厳しく制限されることを論じた。

(4) 接続表現「ので」と now that 節, in that 節を比較対照し, 原因や理由の意味を派生する日英語の言語化プロセスの相違を分析した。「ので」節の「の」と now that 節や in that 節の that は名詞節化する共通の機能を有する。しかしながら, 「の」はそれ自体が命題情報の既定性を積極的に保証するのに対して, that は節内の情報の既定性を積極的には表示しない。英語の now that 節は主節の情報を時間軸に位置付けることで, また in that 節は主節の情報を空間領域に位置付けることで that 節の情報が既定的に解釈され, 「ので」と類似した意味を表現することを説明した。つまり, 「ので」節と now that 節や in that 節が類似した因果関係の意味解釈を表現しても, それは時間と空間という異なる認知基盤に基づく言語化のプロセスを経ることを明らかにした。

なお, 本研究成果の一部は, 平成 21 年度科学研究費補助金 (研究成果公開促進費 (学術図書) 課題番号 215060, 日本学術振興会) により『「の(だ)」に対応する英語の構文』(東京: くろしお出版) として刊行される。

また, 平成 21-23 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 研究代表者: 大竹芳夫) 課題番号 21520502, 日本学術振興会「日英語の名詞節化形式の意味と談話機能の派生メカニズムに関する理論的・実証的研究」の新規交付を受けることが内定しており, 本研究で見出された基本的知見と着想を, 次年度以降の研究においてさらに深化, 発展させながら, 成果を国内外に向けて積極的に発信する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 「解釈・実情を伝える構文: It is that 節構文の意味特性と使用条件」
『新潟大学経済学年報』 第 33 号. 査読無. pp.79-90. 2009 年.
大竹芳夫 (単著) .
- ② 「比況を表す英語構文の実証的考察」
『新潟大学経済論集』 第 86 号. 査読無. pp.217-226. 2009 年. 大竹芳夫 (単著) .
- ③ 「「の(だ)」構文に対応する世界の諸言語の構文: 今後の「の(だ)」構文研究の可能性を求めて」 『信州大学教育学部紀要』 第 120 号. 査読無. pp.27-38. 2008 年. 大竹芳夫 (単著) .

- ④ 「「の(だ)」に対応する英語の構文」
博士 (応用言語学) 学位論文. 明海大学. 査読 (学位審査) 有. xx+289pp. 2008 年 3 月 22 日学位授与. 学位審査委員
主査: 明海大学教授・筑波大学名誉教授
原口庄輔先生, 副査: 明海大学名誉教授・慶應義塾大学名誉教授 小池生夫先生, 明海大学教授・慶應義塾大学名誉教授 西山佑司先生, 明海大学教授・東京外国語大学名誉教授 井上史雄先生, 明海大学名誉教授 田部滋先生.
大竹芳夫 (単著) .
- ⑤ 「新刊書架 Book Review: *Shorter Oxford English Dictionary, Sixth Edition*」
『英語青年』 第 153 巻第 11 号. 査読無. pp.698-699. 東京: 研究社出版. 2008 年.
大竹芳夫 (単著) .
- ⑥ 「4 技能のバランスを考慮した指導法: バランスあるフィードバックと文法意識を高める指導の観点から」
『教科研究中学英語』 第 112 号. 査読無. pp.2-3. 東京: 学校図書. 2008 年.
大竹芳夫 (単著) .
- ⑦ 「教科書で扱われる英語の文法: 新しい言語理論と教材開発の視点から」 『平成 19 年度文部科学省委託事業「英語指導力開発ワークショップ」報告書』 (平成 19 年度英語指導法開発事業 (通称: 英語指導力開発ワークショップ事業)) 査読無. pp.159-168. 2008 年. 大竹芳夫 (単著) .
- ⑧ 「日英語の名詞節化構文の意味と機能: {It is that /S take it that} 節構文と「のだ」構文」 溝越彰・小野塚裕視・藤本滋之・加賀信広他 (編) 『英語と文法と』 編者による査読有. pp.63-75. 東京: 開拓社. 2007 年. 大竹芳夫 (単著) .
- ⑨ 「既定情報の否定: 英語の {It is not that / Not that} 節構文と「のではない」構文」
『信州大学教育学部紀要』 第 119 号. 査読無. pp.91-102. 2007 年.
大竹芳夫 (単著) .
- ⑩ 「日英語における情報の既定化: 英語の S take it that 節構文と「のだ(よ)ね」構文」
『信州大学教育学部紀要』 第 119 号. 査読無. pp.103-111. 2007 年.
大竹芳夫 (単著) .

[学会発表] (計2件)

- ①「名詞節化詞「の」を伴う構文と対応する他言語構文の特性」
〔新潟大学言語研究会 (NULC) 第 29 回研究発表会〕(平成 20 年 7 月 28 日, 於:新潟大学) . 大竹芳夫 (単独) .
- ②「解釈を伝える構文: It is that 節構文の意味特性と使用条件」
〔第 15 回ことばを考える会研究発表会〕(平成 20 年 9 月 10 日, 於:新潟大学) . 大竹芳夫 (単独) .

[図書] (計1件)

- ①『「の(だ)」に対応する英語の構文』
東京:くろしお出版. (印刷中:2009 年 11 月刊行予定) 大竹芳夫 (単著) .
【平成 21 年度科学研究費補助金 (研究成果公開促進費 (学術図書) 研究代表者: 大竹芳夫) 課題番号 215060, 日本学術振興会】

[その他] (計13件)

- ①KAKEN: 科学研究費補助金データベース
<http://kaken.nii.ac.jp/ja/r/60272126>
- ②研究代表者所属研究機関ホームページ
<http://researchers.adm.niigata-u.ac.jp/R/staff/?userId=100000139>
- ③本研究と関連する研究助成:
平成 21 年度科学研究費補助金 (研究成果公開促進費 (学術図書) 研究代表者: 大竹芳夫) 課題番号 215060, 日本学術振興会
- ④本研究と関連する研究助成:
平成 21-23 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 研究代表者: 大竹芳夫) 課題番号 21520502, 日本学術振興会「日英語の名詞節化形式の意味と談話機能の派生メカニズムに関する理論的・実証的研究」
(交付内定総額: 4,290,000 円)
- ⑤本研究と関連する研究助成:
平成 20 年度新潟大学プロジェクト推進経費 (奨励研究, 研究プロジェクト代表者: 大竹芳夫) 「名詞節化構文の意味派生と談話機能のメカニズムに関する日英語比較対照研究」 (交付額: 496,000 円)
- ⑥本研究と関連する研究助成:
平成 20 年度新潟大学人文社会・教育科学系長裁量経費による研究プロジェクト (学系奨励研究, 研究プロジェクト代表者: 大竹芳夫) 「日英語の名詞節化形式の統語構造と意味・機能のインターフェースに関する研究」 (交付額: 400,000 円)

⑦本研究と関連する研究助成:

平成 14-16 年度科学研究費補助金 (若手研究 (B) 研究代表者: 大竹芳夫) 課題番号 14710329, 文部科学省「日英語の名詞化補文の普遍性と個別性に関する記述的・理論的研究」
(交付額: 3,100,000 円)

⑧本研究と関連する研究助成:

平成 13 年度文部科学省在外研究員 (米国ハーバード大学言語学科客員研究員) 派遣調査区分および調査研究題目: 文学 (言語学) 「日英語の名詞化補文と認知構造に関する研究」 派遣対象者: 大竹芳夫.

⑨本研究と関連する研究助成:

平成 11-12 年度科学研究費補助金 (奨励研究 (A) 研究代表者: 大竹芳夫) 課題番号 11710260, 文部科学省「日英語の名詞化補文に関する記述的・理論的研究」
(交付額: 1,800,000 円)

⑩本研究と関連する研究成果還元講座:

平成 18 年度信州大学出前講座
「英語と日本語: 意味が違えば形も違う」
(平成 19 年 3 月 1 日, 於: 長野県飯山北高等学校) 講師: 大竹芳夫

⑪本研究と関連する研究成果還元講座:

平成 19 年度信州大学出前講座
「英語と日本語: 意味が違えば形も違う」
(平成 19 年 5 月 25 日, 於: 長野市氷鉋老人福祉センター「生きがいつくり講座」)
講師: 大竹芳夫

⑫本研究と関連する研究成果還元講座:

平成 19 年度信州大学出前講座
「英語と日本語: 意味が違えば形も違う」
(平成 20 年 2 月 27 日, 於: 長野県須坂東高等学校) 講師: 大竹芳夫

⑬本研究と関連する研究成果還元講座:

平成 20 年度新潟明訓高等学校第 15 回進学セミナー「意味が違えば形も違う: ことばは文化の乗り物、心の鏡」(平成 20 年 9 月 24 日, 於: 新潟明訓高等学校)
講師: 大竹芳夫

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大竹 芳夫 (OTAKE YOSHIO)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号: 60272126

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし